れっつあにまろ

北と南

天海ヒロ(福田博行)

南北問題は、経済・社会的問題か？
それとも‥？

南北問題を超拡大解釈して遊んで見る

南北問題は、経済格差問題か？

南北問題（英: North–South divide）
1960年代に入って指摘された先進資本国と発展途上国の経済格差とその是正をめぐる問題。豊かな国が世界地図上の北側に、貧しい国が南側に偏っていることから南北問題と呼ばれる。

イデオロギーと軍事の対立である東西問題に比肩する重要課題として、地球上の北側に位置する先進工業国（Industrial Countries）と南側に位置する開発途上国（Developing Countries、発展途上国ともいう）における問題提起を行うとともに、世界のバランスの中心が西ヨーロッパから新たに発展しつつある国々に移るであろうと述べた。

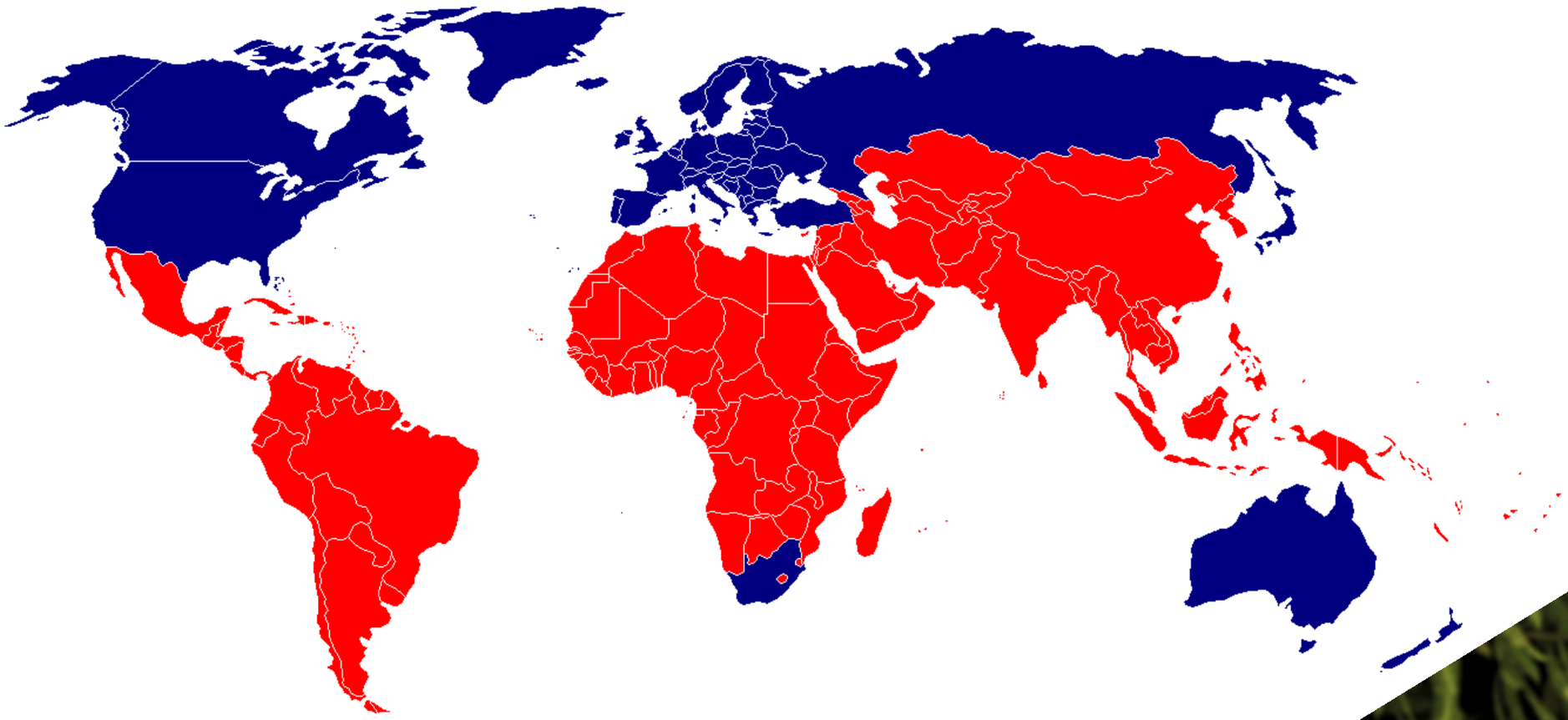
▶Wikipedia 『南北問題』抜粋

南北問題 ➡ 先進国-途上国
消費国と供給国の経済格差

東西問題 ➡ イデオロギーと軍事対立

先進国　西洋諸国、日本

途上国　アジア、アフリカ、中南米



奇門遁甲と南北問題

鬼門遁甲は、諸葛孔明も使っていたとされる、気学、方位学の土台となった、古代中国の占術、呪術の一種。伝説では黄帝が天帝から授けられたとされます。その奇門遁甲や、算命学には、勝敗について南北の法則があります。

『北から南に攻める方が強い』
『南から北に攻めるのは難しい』
『北は支配のポジション』

奇門遁甲と南北問題

アメリカ「南北戦争」➡北軍が勝利

ベトナム戦争(南北統一戦争) ➡”最終的”には北ベトナムが勝利南ベトナム消失

朝鮮戦争 ➡南北で互角のように思われるも、
常に戦局は北側が有利に進み、加勢した国の数など戦況は北側が優勢。

経済競争 ➡ 奇門遁甲の中国が、長らく途上国だった

生命における南北格差

鬼門遁甲は、生命原理に由来があるか？

ベルクマンの法則(規則)

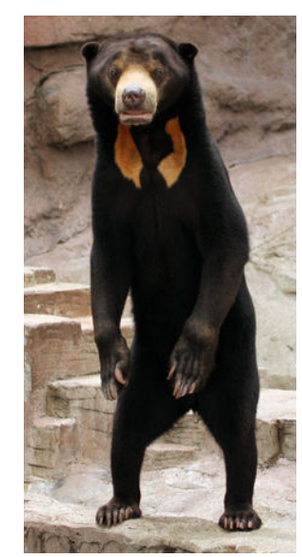
恒温動物は、寒冷な地域ほど巨大化する傾向が広く見られます。体が大きいほど体重に対する体表面積が小さくなり、放熱しにくくなる、栄養(脂肪)を蓄える、というのが主な理由とされます。

シロクマ
～340cm/800kg

ヒグマ
～300cm/500kg

ツキノワグマ
～180cm/150kg

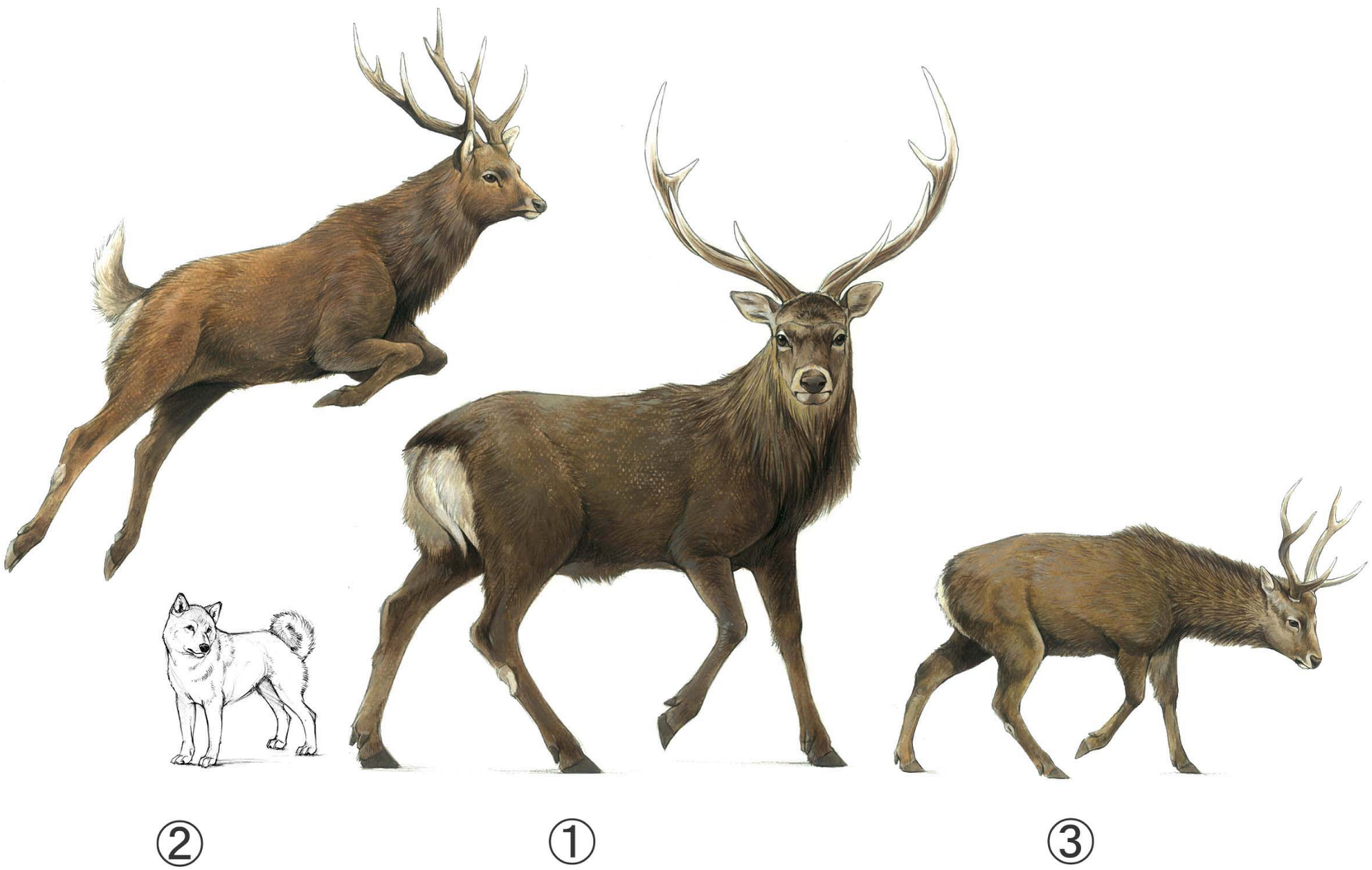
マレーグマ
～150cm/65kg
最小のクマ
小型個体は25kg



生命における南北格差

逆ベルクマンの法則

昆虫、爬虫類など変温動物は南の方が大きくなる傾向があります。変温動物は、体重に対する対表面積が小さくなるほど、太陽光や外気で体温を上げやすくなります。また、暖かいほど行動時間が長く、大きくなりやすい。



①エゾシカ
90〜140kg

②ホンシュウジカ
85〜120kg

③ヤクシカ
24〜37kg

④ケラマジカ
30kg程度
日本最小種

『北風が勇者バイキングを作った』

生命は過酷な環境では、力を蓄える必要があるため強くなる傾向があります。しかしそれは、8割の動物に適用できる水平進化(外骨格系進化)の法則。人類を生む垂直進化(内骨格系)は反転作用を内在するのでそう単純ではありません。しかし、北が勝つというのは、生命において、8割以上に適応できる法則(というより傾向)と言えます。

『雪が越冬野菜を甘くする』

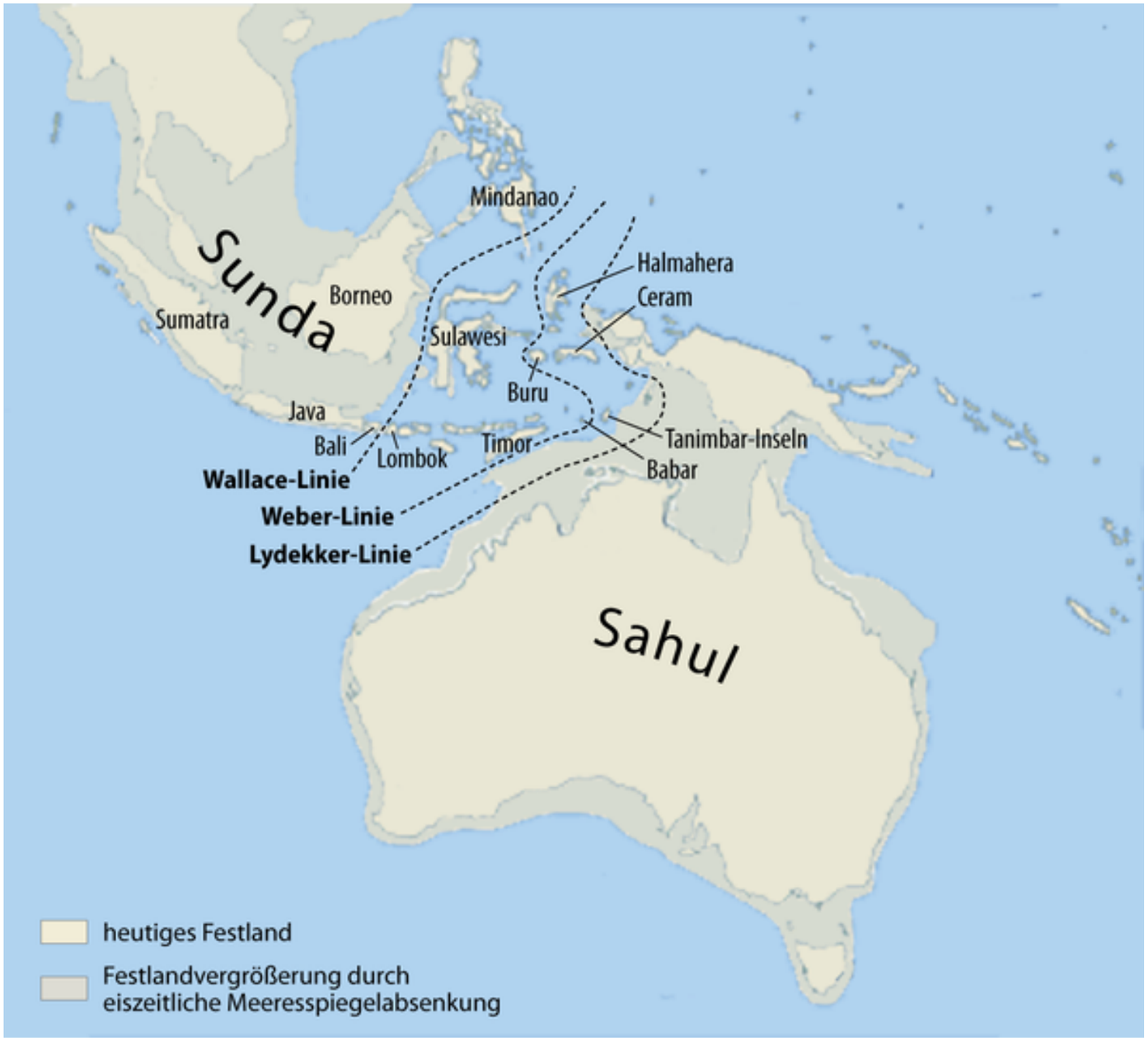
生物地理学・分布境界線における南限・北限

分布境界線

個々の生物種の分布域の範囲を区切る線であるが、特に、生物地理学において、多くの生物の分布の境界になっている、生物相の異なる区域の境界線のこと。ウォーレス線が有名。

南限・北限

動物種が生息する南北緯度の限界。南北の分布境界線。日本では、北海道やカラフトの間の八田線、ブランキストン線、鹿児島の離島から沖縄にかけて、渡瀬線、蜂須賀線があります。



ウォレス線とウェーバー線(新ウォレス線)

生物の南限･北限と文化境界

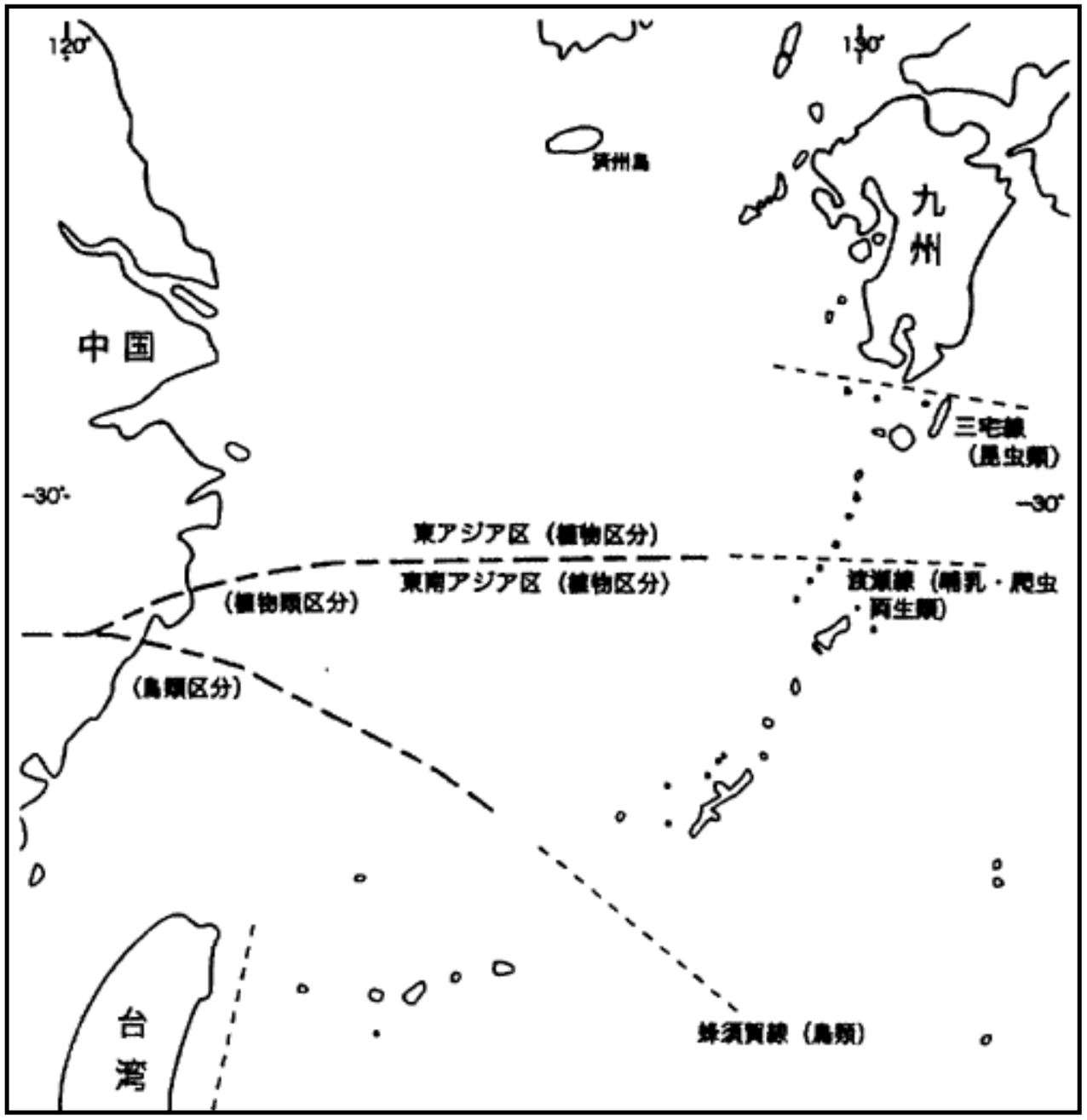
南西諸島に見る南限･北限

渡瀬線(わたせせん)

屋久島，種子島と奄美群島の間の動植物の分布境界線。渡瀬庄三郎が，哺乳類，鳥類，爬虫類，両生類，昆虫類，クモ類，陸産貝類などの分布上，この線が東洋区と旧北区 の境界であることを確認した。

蜂須賀線(はちすかせん)

沖縄諸島と八重山諸島の間に引かれた、鳥類の分布の違いに基づいた境界線。旧徳島藩主蜂須賀家の第16代当主大蜂須賀正氏が提唱。境界の南側では、陸産貝類や淡水性の甲殻類に台湾との共通種が多く見られる。



生物の南限･北限と文化境界

渡瀬線、南端奄美大島に見る北限種･南限種

渡瀬線のある奄美群島最大の島である奄美大島と、それを超えた沖縄には、南限･北限の動植物が多数見られます。特に奄美大島は本島と琉球の中間的であり、また、独自の固有種がたくさん見られます。面白いことに同様に、文化的にも、大和と琉球は、大きく異なる文化を持ち、その中間の奄美大島は、中間的であると同時に固有の文化を持ちます。

奄美琉球における北限・南限種（植物）

区分	地　　域	種　　数	区分	地　　域	種　　数
北限種	奄美大島	132	南限種	奄美大島	20
	沖縄島	54		沖縄島	73

〔出典：「国立・国定公園の指定及び管理運営に関する検討会」第２回指定分科会資料（環境省 自然環境局 国立公園課）〕

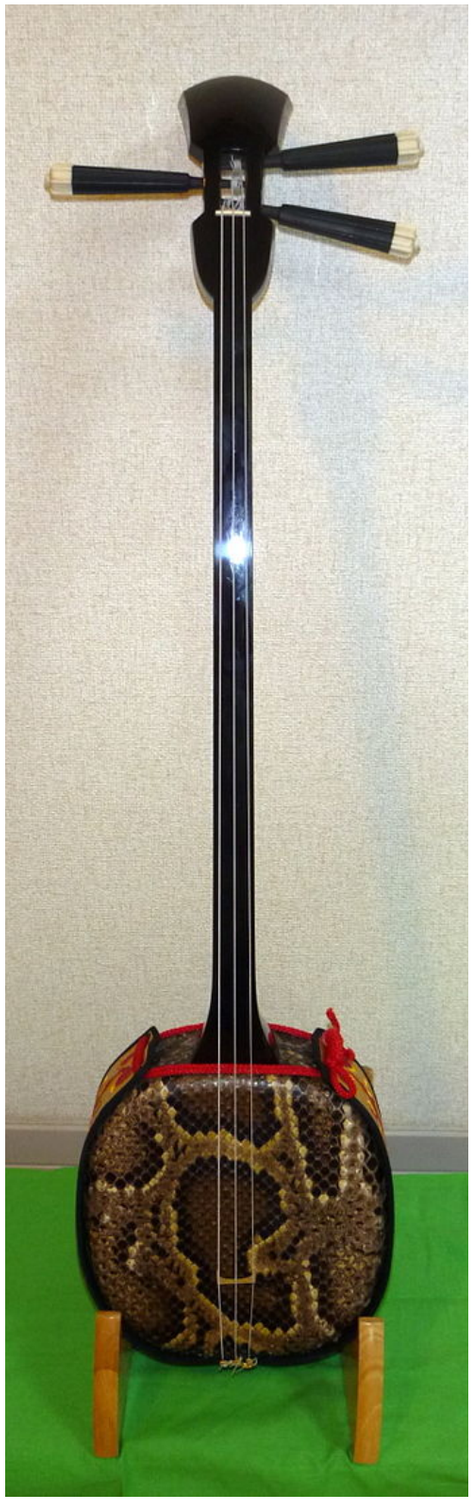
アカマタ

〔撮影：浜田 太〕

ハロウェルアマガエル

〔撮影：常田 守〕

生物の南限･北限と文化境界
民族音楽　三線(さんしん)と歌謡



●沖縄　三線(さんしん、しゃみせん)

沖縄民謡の楽器。ヘビ皮張り。一般に弦は白い。陽気な響き。中国、福建省の三弦を起源とし14世紀末から15世紀に誕生。

●奄美群島　三線、三味線、蛇皮線(じゃびせん)

島唄の楽器。ヘビ皮張りで沖縄の三線に近い。本土の影響を受けて大きいものも。弦は黄色で細く、哀愁漂う高音の響き。

●本島･民謡　三味線(しゃみせん)

民謡の楽器。猫、犬の皮。沖縄の三線を原型に江戸中期に本土で独自に発達。民謡の楽器。

生物の南限･北限と文化境界
民族音楽　三線(さんしん)と歌謡

⚫琉球音楽家(沖縄)

沖縄音階。(二六抜き音階)。主音をラから、二番目、六番目、シとファがない五音階。インドネシア、東南アジア(ガムラン)にも見られる。島唄とも呼ばれるが、琉球民謡が正式。BOOMの島唄ヒットにより定着。近代の沖縄歌謡は沖縄民謡の延長にあり、民謡と歌謡の区別が曖昧。宮古民謡などは神歌に起源があり、神歌、古謡、民謡に分けられる。裏声は逃げの声とされ使ってはいけない。

⚫島唄(奄美群島)

四七抜き音階。雅楽の呂旋法と同じもの。主音ドから四番目、七番目のファとシが無い五音階。スコットランド、ラテンアメリカのフォルクローレなどに見られる音階。島唄は本来奄美民謡を意味した。シマは村落を意味し、村の唄(シマ社会の唄)という意味があり、村ごとに異なる特徴もある。こうした表現は奄美から始まった。ヨーデルのように、裏声を主にした、特殊な唄い方が特徴。諸説あるが、ルーツは信託にあり、おなり神信仰による、男性唄者の、女性の声に近づけるためとも言われる。神唄、童唄、民謡に分けられる。島唄は、音階は本土に近く、楽器は沖縄に近い。

⚫民謡 (本土)

四七抜き音階。日本の民族音楽の総称だが、狭義には沖縄民謡、アイヌ民謡を含まない。つまり、縄文系文化圏を含まない。裏声は逃げの声とされ、使ってはいけない。

メディスンアニマルの北と南

北

知恵の方位。賢明な助言を与える方位。理性。

南

内なる子供をら守る方位。無邪気さの方位。純粋性。直感。

東

スピリチュアルな光明と試練

西

真実と内なる答え。ゴール達成の道。

南北問題の背後に浮かぶもの

最後に残るのは、始まりの大地と最後の大地か？

南北問題フラクタル　経済問題から内なる調和へ

先進国⇔発展途上国

一神教的世界⇔多神教的世界

日本⇔琉球

弥生⇔縄文

理性的⇔直感的

頭⇔身体

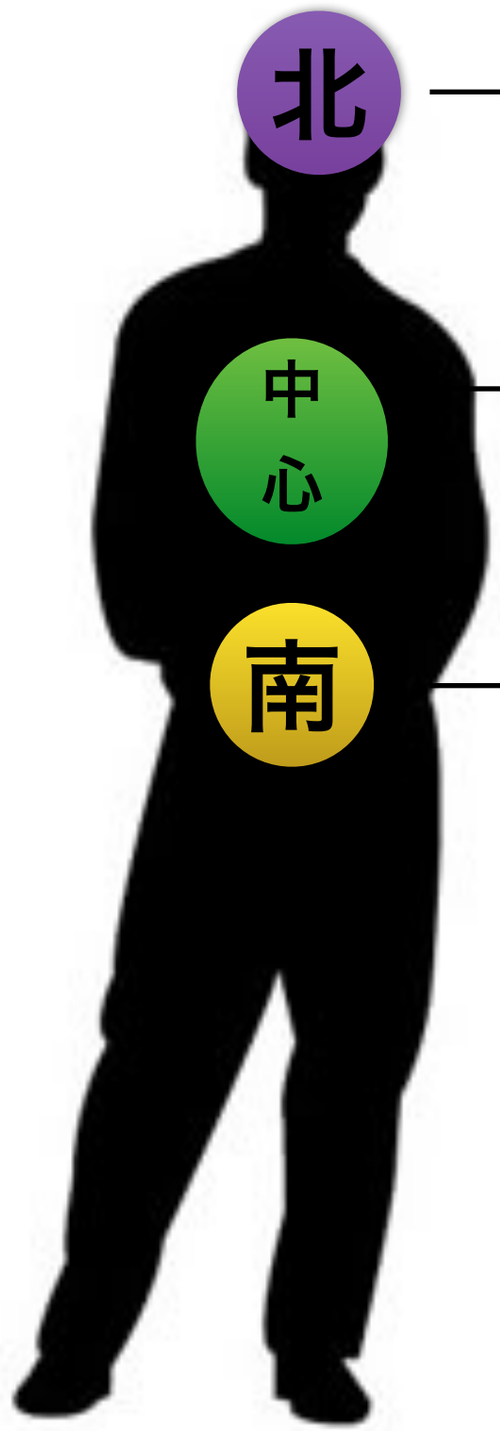
合理⇔非合理

外骨格系⇔内骨格系

ウハネ⇔ウニヒピリ

陽⇔陰

南北問題フラクタル　経済問題から内なる調和へ



頭‥‥理性、大和、ウハネ

胸‥‥境界線、奄美大島

腹‥‥直感、琉球、ウニヒピリ

南北問題フラクタル　経済問題から内なる調和へ

南北問題は最終的な表層の表れに過ぎず
何層にも多層化した、本質的な対称性と対立とフラクタルなのかもしれません。
南北問題の構造は、そのまま琉球と日本に見ることができます。また、それは、近代と古代へとつながり、一神教的世界とシャーマニズムの対立、理性と感性、そして、個人におけるウハネとウニヒピリの対立へと繋がって行くのかもしれません。

南北問題フラクタル　経済問題から内なる調和へ

●ウニピヒリとウハネの関係は、近代ではウハネがウニピヒリを抑え込むことで、支配･抑圧します。それによって潜在的対立を内在します。

●また、その反動として、ウハネがあばれ出し、ウニヒピリが無力化し問題が表面化します。

●ハワイシャーマニズムの理想的な形は、ウハネが兄として、ウニヒピリを妹として支える、と言うものです。

●聖なる兄と妹の関係は、日本では琉球祭祀、琉球、奄美大島の、ノロ、ユタの世界に見られる、おなり信仰そのものでもあります。